

真 頭旗五百

防衛大学校長

時代の風

日本の高い文明水準

日本という文明の盛衰について考えてみたい。

今日の日本は衰退期にあると、多くの人が感じている。それは本当か。そうだとすれば、どのような意味で衰えつつあるのか。上向きか下向きかはともかく、そもそも日本文明とはどのようなものなのか。その特徴は、その水準は、その国際的位置は、どうなのか。この国の豊かな歴史はこの問いにどう答えているのか。われわれはいつも眼前の事態に夢中になるが、時には大きな歴史地図の中で現在の地と進路を俯瞰してみようではないだろうか。

日本は乱れ、転落しようとしているとの意識が強まったのは、鎌倉時代であった。武力による応酬のやまない當時の状況を、識者たちは正法↓違法↑未法の大乗仏教の概念と重ね合わせ、未法思想にまとめた。承久の乱を見守りつつ「愚問抄」を書いた慈円は、

歴史の大サイクルは未法に向かっているとしつつ、歴史は一曲調ではなく、その中に小サイクルの振幅があり、一定の上昇局面もあると觀察した。大小サイクルが共に転落に向かう状況にあって人はなす術がないが、西者が打ち消し合う事態にあって、人為は有意性を持ちうる。大切なのは歴史における道理を知り、人がそれを積み行うことであると説いた。

西洋文明克服の方途

元寇の時代を生き延びた日蓮は、正法を喪失したことが世の乱れをもたらしたと政治と人々に激しく戒心を迫りつつ、世界「大闘争」の起こる未法の極みにこそ、かえって「妙法」の機が来ると逆転勝利の終末思想を説いた。その後の応仁の乱から戦国に至る乱世は、未法の名にふ

さわしい理想であった。しかし、とめどない破壊エネルギーは、ついに瀬川の手で消滅され、逆に1590年に及ぶ日本史上最長の平和時代を持つことになった。

問題は、世界から隔離された長期平和の間に、イギリスで産業革命が始まったことである。それまでの諸文明が人力と馬力によって動いたのに対し、産業革命以後の西洋文明は動力によって地上と水面

を走るようになった。西洋文明は人類史上はじめての世界文明となった。西洋列強のみが世界政治の主体となり、非西洋社会はその客体に転落した。世界各地の非西洋社会をわがものに収めつつ膨張する西洋の力が、鎖国日本にまで及んだ。日本史上空前の危機が迫っていた。

もし日本の文明水準が低いものであれば、他の多くの非西洋社会のように、日本も19世紀に植民地化されていたであろう。江戸時代の日本は、

産業革命が生み出した利権と近代シテムこそ手にしていなかったが、識者率は同時代の西洋諸国に劣らなかつた。日本が西洋文明の力の中から適くに位置した地理的

の好運もあった。けれども、日本が格別な対応力を発揮しなければ、列強に対し国を閉ざしながら独立を守り、半世紀後に西洋の軍事大国ロシアに

言で書けば、民族的フライドの発露である。有力な外部文明の挑戦を受ける時、誇り高い社会には熱狂的な愛国派(ゼロット)が登場すること

とはいえ、大きな力の差がある西洋文明諸国のような強者に対して、軍事対決一辺倒で対応すれば、民族的玉碎の危険を冒すことになる。ローマの侵襲に際して、ユダヤ

することを通じて、強大な外部文明の力の秘密を学ぶ。それをもって備えた外力を歴史的に克服する冷静で合理的な対応である。露英戦争や露清

ある。幕末に発端した諸国エネルギーが爆発した西洋文明を内面化された時、近代日本は西洋文明を克服する唯一の非西洋国としての行路を見いだしたといえよう。今日の衰退を論ずる前に、日本史が「西洋の世界史」を「世界の世界史」へ転換する世界的役割を果たしたことを認識して拍きたい。それ程に高い水準を日本文明は築いているのである。



二兵衛公治撮影

勝利し、西洋列強と並び立つ世界の主要国の一つに日本が成長することなどありえなかつたであろう。そんな対応が、日本を非西洋社会の中での例外となし得たのであるか。

幕末から維新にかけて吹き荒れた攘夷運動の嵐とその収束に、その跡が示されていると思われる。「攘夷」は一

トインビーは他方の典型的な対応の型として「トロイ」を挙げる。強大な外敵に玉碎